Japanese Association of Educational Psychology

部門別論評

1979年から1981年までの教育心理学方法論

黒田正典
（東北福祉大学）

Ⅰ　研究発表全体を特徴づける徴標群

方法論または原理・方法の部門の発表23編を検討して，それらを特徴づける徴標として以下の諸概念を見いだす。まず全研究を位置づける目盛りとして，(1)教育現実接近目標，(2)文化・社会的要因配慮，(3)人間化・人間主義，(4)客体化・客体主義，(5)記号化・数理主義，(6)科学的理論目標。第二に方法論的な進度として，①問題論（Problematik），②前提（Voraussetzung）論，③枠組（framework）論，④経験的研究，⑤体系的理論。ここで，①は問題の所在の指摘で，専門的研究の歴史から導かれる場合と生活経験から出る場合とがある。②は研究の発足に当り予め…と約束しておくもので，たとえば研究の対象の概念的定義や種々の仮定をしておくことなどである。③は経験的研究の推進に必要な仮説・仮説群や実験・調査の設定などである。④が科学的研究の中心的領域である。⑤は経験的研究の成果を過去の学問的知識の中に位置づけ，包括的な説明理論とするものである。いわゆる理論（theory）は欧米の文献では①②③の諸段階と⑤を意味するが，わが国では⑤だけを考える人が多い。なお原理の語は理論と意味は等しいと私は考える。第三の観点は研究の性格が教育心理学的か一般心理学（allgemeine Psychologie）的かである。教育心理学会では日本心理学会の原理部門と変らぬ内容も発表されるが，これは，一般心理学の理論はおのずから教育心理学の理論的基礎となるという意識によるものであろう。第四は私のいわゆる個性変様的（idiomodific）な性格の有無である。研究者自身が，第三者的観察を固守するのでなく，自己を変様させつつ対象を変様させて認識の目的を達成しようとするもので，教育現実接近目標を完全に果たすにはこれが必要であると考えられる。

Ⅱ　研究発表の個別的検討

上述の徴標群を使って諸研究を個別的に検討しよう。まず教育現実志向が最も強く感ぜられたものは指導観察的アプローチに関する斉藤誠一他の発表*（1979・101～102後の数字は発表番号）と，教育実践と精神的健康性に関する上田吉一他の発表*（1981・104～6）であろう。両者とも教育実践にかかわる教育心理学的研究であり，かつ研究者群の一部はみずから生徒に働きかけるので個性変様的（*印をつけることにする）である。進度は問題論から始まり経験的研究の段階に及んでいる。飯島婦佐子（1980・105）は，内発的動機を重視した倉橋惣三の保育理論を再評価し，さらに倉橋理論を26年間実践していたD幼稚園について種々の客観的な観察・測定を行っている。進度は枠組論および経験的研究の段階といいうる。人間主義の陣営にあり，教育心理学的といえるが，進度は問題論・前提論の範囲と考えられるのは，佐藤芳男（1979・103），朴沢一郎（1979・104），上田吉一a（1979・106），島崎保（1979・108）上田吉一b（1980・101），竹内長士（1980・107）の発表で，それぞれ質問紙の教育的意義，スポーツ・宗教のそれ，人格深層の自己実現傾向，人間主義心理学と学校教育の関係，人生目標の教育心理学的機能，教育技術の概念等に新たな照明を当てようとする。人間主義の近傍で一般心理学的接近と解されるものは，行動主義と人間主義の接近・融合を伝える藤野武（1979・109），比較言語学的分析から日本人論に迫る阿部孫四郎（1980・102），禅体験を記述する恩田彰（1980・104）*の発表であるが，阿部論文が一種の経験的研究といえるのに対して，他の2つは新たな問題領域を指摘する問題論である。そのほか「気」と「間」を論ずる宮本昇（1980・106），裁判過程を扱う小田信夫（1981・107）の発表も人間主義的・一般心理学的・問題論的といえよう。科学的理論目標と見られるのは阿部孫四郎（1979・105），筒井健雄（1979・105，1980・103，1981・102）である。阿部は同型論を前提としてトポロジ的演算を行いつつ種々の社会的事象，たとえば戒律の説明を進め，一種の数理主義といえよう。筒井は数理主義ではないが，記号化の手段によって論理的に存在一般や心理学的諸概念を分析してゆき，これが同時に人間科学であるとする点に筒井の主張の独自性がある。両者とも一般心理学的・枠組論的といえよう。教育心理学書の統計的分析から教育心理学のあり方を探るものは高山達雄（1979・110），福沢週造（1980・110）で，前者は引用文献，後者は内容項目から接近し，一種の体系的理論の検討とも考えられる。以上を批評すると，全体として教育心理学的接近と文化・社会的要因配慮のいっそうの強化が望まれる。

参考（方法論）年報社会心理学，第19号，勁草書房，1978，編集後記。（個性変容的）杉溪一言編，現代の心理学を考える，川島書店，1982，拙稿論文。

NII-Electronic Library Service